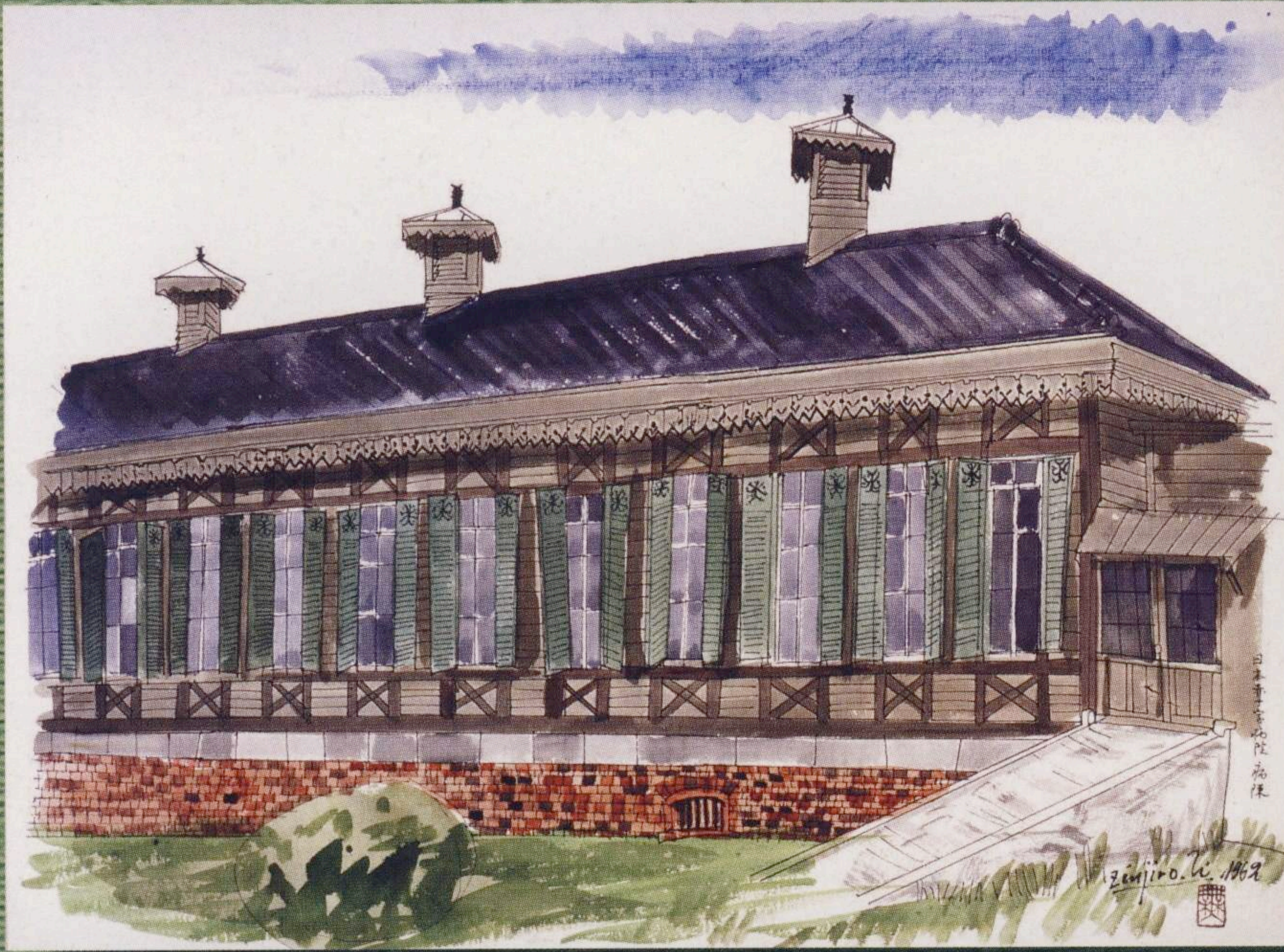


# MEIJI MURA

明治村だより

Vol.63 2011 Spring



ドイツで製作された明治宮殿の絨毯  
ヴォンデ、ペアーテ ..... 2

「特定公益増進法人認定」に伴う  
建造物移築保存修理紹介 ..... 6

明治村文化講座「明治塾」のご案内 ..... 9

春の催しもの ..... 10

# ドイツで製作された明治宮殿の絨毯

ヴォンデ、ベアーテ

ベルリン国立図書館で、私は数ヶ月間にわたって、

日本の軍医で後に作家となる森鷗外のベルリン滞

在中の情報を収集するために、一八八七・一八八八

年の新聞を読んでいました。森鷗外に関することは

みつけれませんでした。そのかわりに、そこで

一八八七年十一月十五日付けのベルリナー・ターゲ

ブラット新聞(写真3)の記事を偶然目にしました。

それはラウジッツ地方※1生まれの私としては興味

をかきたてられるものでした。

『ドイツ産業が日本へ。』

コトブスからのたよりには日本の皇居の謁見の

間のための絨毯がO.Prietsch製絨所※2(写真4)で

先週の土曜の午後と日曜の午前中展示：』

この記事は『ハンブルクの有名な室内装飾会社の

ハイマン社(J.D.Heymann)(写

真5)は四年間にわたり、日本

との交渉に入っていたとのこと。

彼らは最終的に、日本の皇居の

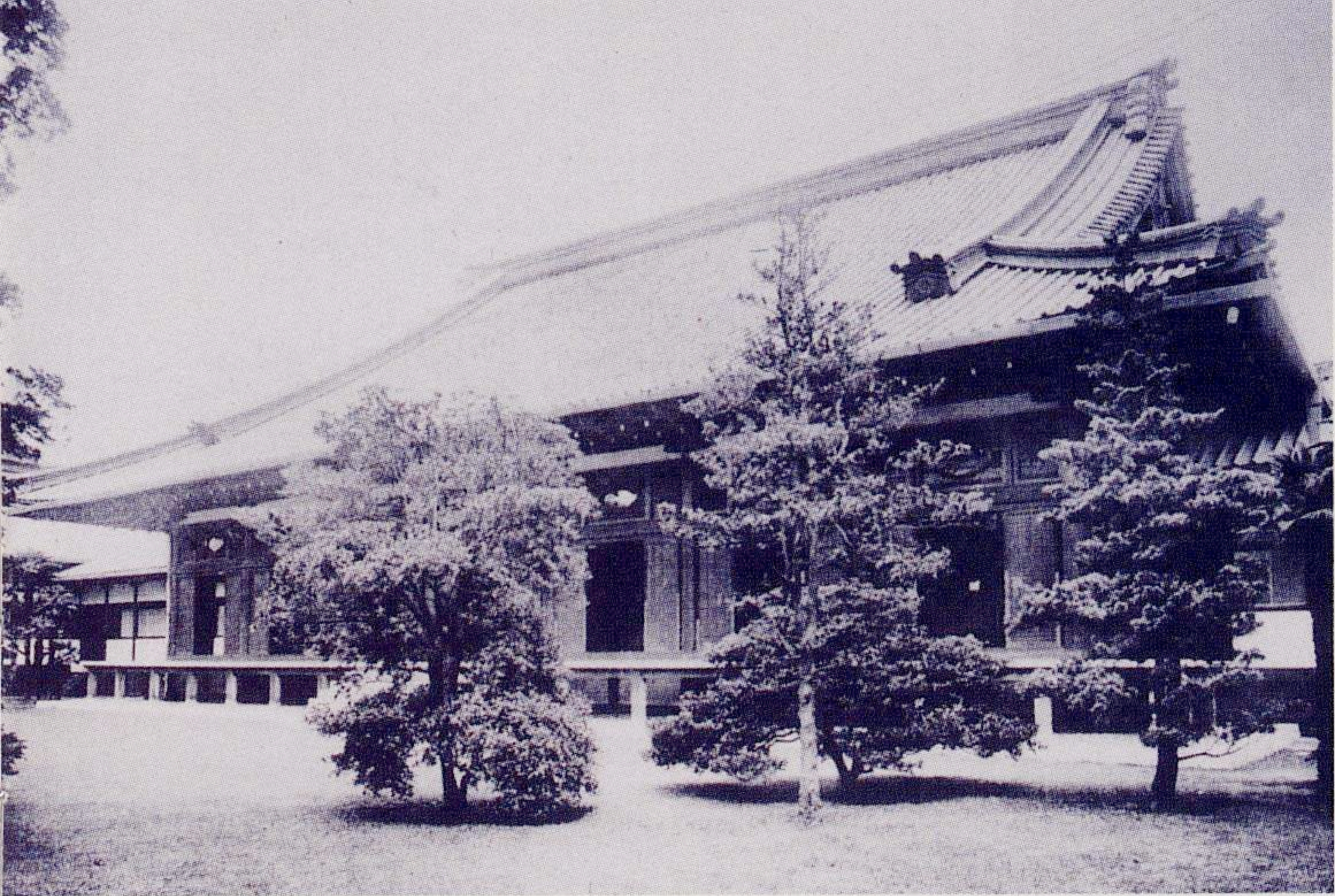


写真1 明治宮殿正殿外観

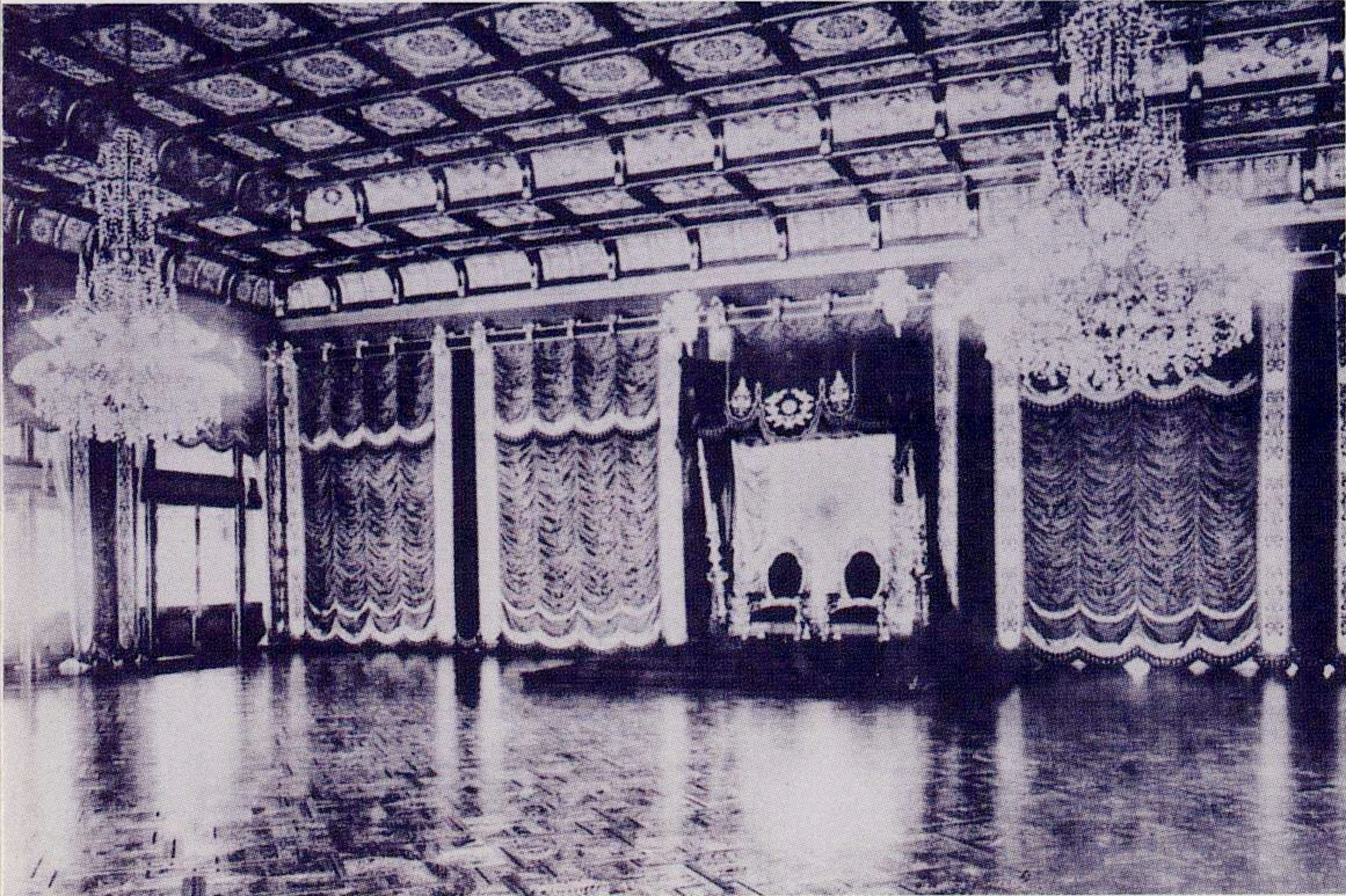


写真2 明治宮殿正殿

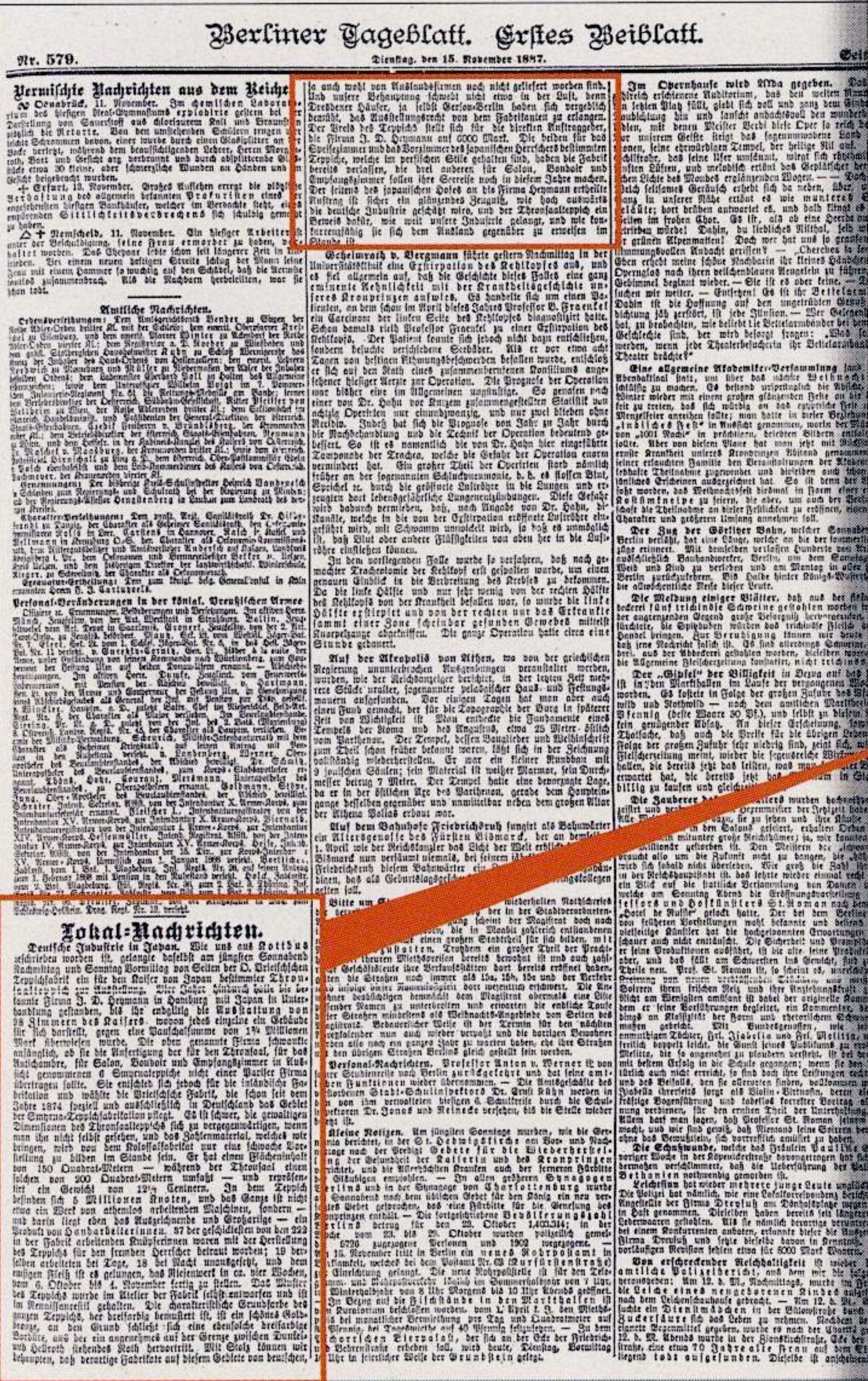


写真3 1887年11月15日付ベルリナー・ターゲブラット紙

### Lokal-Nachrichten.

#### Deutsche Industrie in Japan.

Wie uns aus Kottbus geschrieben worden ist, gelangte daselbst am jüngsten Sonnabend Nachmittag und Sonntag Vormittag von Seiten der D. Reichslichen Teppichfabrik ein für den Kaiser von Japan bestimmter Thronsaalteppich zur Aufstellung. Der Herr Fabrikant hat die bekannte Firma J. D. Heymann in Hamburg mit Japan in Unterhandlung gestanden, bis ihr endlich die Ausstattung von 98 Zimmern des Kaisers, wovon jedes einzelne ein Gebäude für sich darstellt, gegen eine Baufaktsumme von 1 1/2 Millionen Mark überwiesen wurde. Die oben genannte Firma schwanke anfänglich, ob sie die Anfertigung der für den Thronsaal, für das Amtszimmer, für Salon, Boudoir und Empfangszimmer in Aussicht genommenen 5 Smyrnateppeiche nicht einer Pariser Firma übertragen sollte. Sie entschied sich jedoch für die inländische Fabrikation und wählte die Reichsliche Fabrik, die schon seit dem Jahre 1874 spezial und ausschließlich in Deutschland das Gebiet der Smyrna-Teppichfabrikation pflegt. Es ist schwer, die gewaltigen Dimensionen des Thronsaalteppichs sich zu vergegenwärtigen, wenn man ihn nicht selbst gesehen, und das Zahlenmaterial, welches wir bringen, wird von dem Kolossalfabrikat nur eine schwache Vorstellung zu bilden im Stande sein. Er hat einen Flächeninhalt von 150 Quadratmetern — während der Thronsaal einen solchen von 200 Quadratmetern umfasst — und repräsentiert ein Gewicht von 12 1/2 Centnern. In dem Teppich befinden sich 5 Millionen Knoten, und das Ganze ist nicht etwa ein Werk von athletisch arbeitenden Maschinen, sondern — und darin liegt eben das Ausgezeichnete und Großartige — ein Produkt von Handarbeitern. 37 der gefärbtesten von den 222 in der Fabrik arbeitenden Knüpferrinnen waren mit der Herstellung des Teppichs für den fremden Herrscher betraut worden; 19 derselben arbeiteten bei Tag, 18 bei Nacht unausgesetzt, und dem emsigen Fleiß ist es gelungen, das Meisterwerk in ca. vier Wochen, vom 6. Oktober bis 1. November fertig zu stellen. Das Muster des Teppichs wurde im Atelier der Fabrik selbst entworfen und ist im Renaissancestil gehalten. Die charakteristische Grundfarbe des ganzen Teppichs, der dreifarbig bemalt ist, ist ein schönes Goldbraun, an den Grund schließt sich eine ebensolche dreifarbige Bordüre, aus der ein angenehmes auf der Grenze zwischen Dunkel- und Hellroth stehendes Roth herortritt. Mit Stolz können wir behaupten, daß derartige Fabrikate auf diesem Gebiete von deutschen, ja auch wohl von Auslandsfirmen noch nicht geliefert worden sind. Und unsere Behauptung schwebt nicht etwa in der Luft, denn Dresdener Häuser, ja selbst Gerson-Berlin haben sich vergeblich bemüht, das Ausstellungsrecht von dem Fabrikanten zu erlangen. Der Preis des Teppichs stellt sich für die direkten Auftragsgeber, die Firma J. D. Heymann auf 6000 Mark. Die beiden für das Speisezimmer und das Wohnzimmer des japanischen Herrschers bestimmten Teppiche, welche im persischen Stile gehalten sind, haben die Fabrik bereits verlassen, die drei anderen für Salon, Boudoir und Empfangszimmer sollen ihre Sereise noch in diesem Jahre machen. Der seitens des japanischen Hofes an die Firma Heymann ertheilte Auftrag ist sicher ein glänzendes Zeugnis, wie hoch auswärtig die deutsche Industrie geschätzt wird, und der Thronsaalteppich ein Beweis dafür, wie weit unsere Industrie gelangt, und wie konkurrenzfähig sie sich dem Ausland gegenüber zu erweisen im Stande ist.

毯※3を、パリの会社に依頼するかどうか決めかね

婦人用着替え室・接見室に用いる六つのスミルナ絨

ハイマン社は当初、謁見の間・控えの間・サロン・

して、概算17億5千万マルク分の受注を受けたが、

ほぼ全室にあたる九十八室の設備・内装・装飾に対



図1 ドイツ地図 (左図はベルリン周辺拡大図)



てた。結局彼らは絨毯をドイツ国内で生産することとし、一八七四年以降ドイツ国内で専門的に中東風の絨毯生産を行い体制も整っている唯一の会社であるO. Prietschの工場を選ぶことを決めた。』と書かれています。

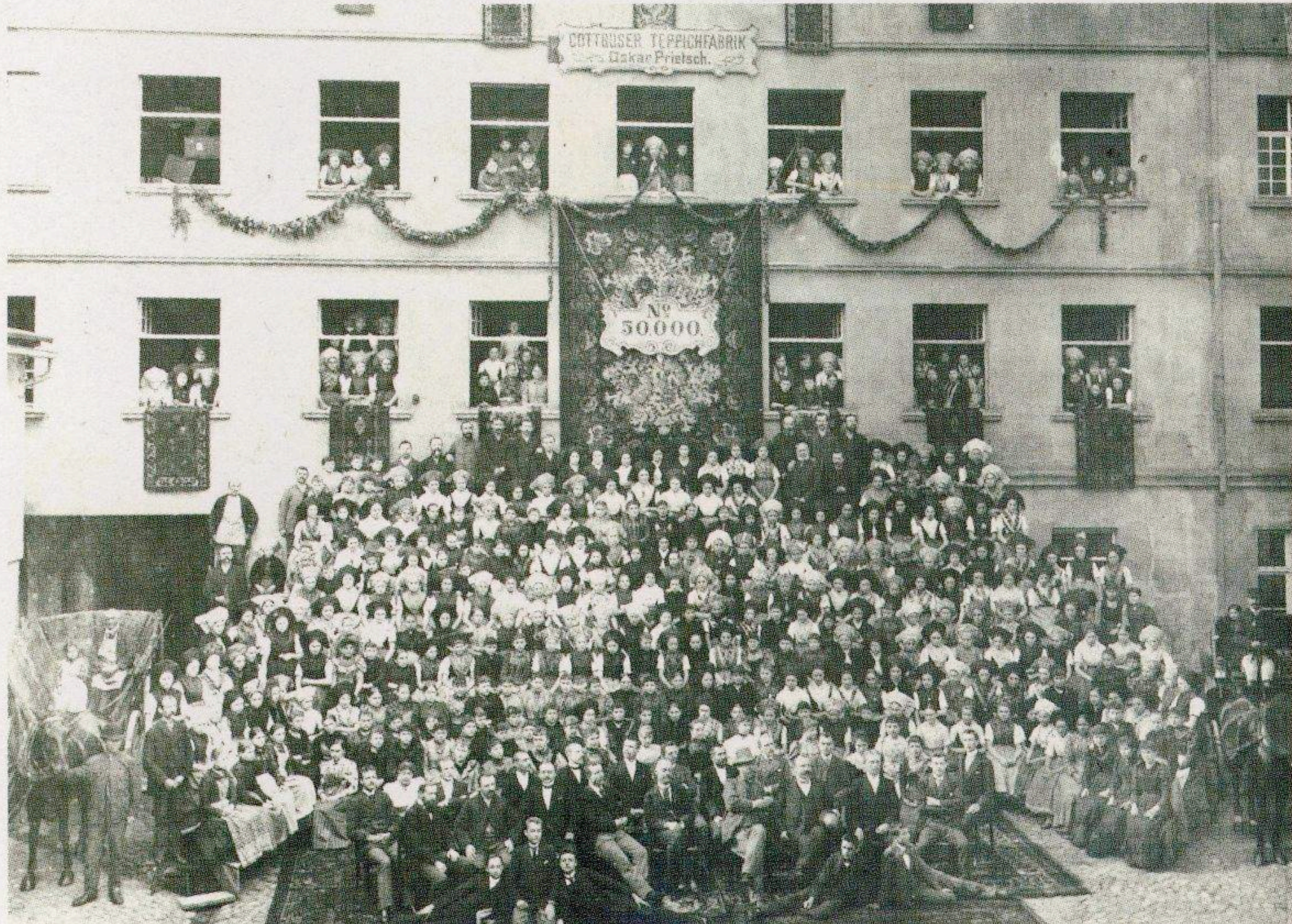


写真4 コットブスの絨毯工場従業員 (絨毯5万枚生産記念写真) Stadtarchiv Cottbus蔵

コットバスで織られた玉座の間の絨毯を新聞は「巨大作品」と呼び、その巨大さを数字で示していますのでここに紹介いたします。

『玉座の間の面積は二〇〇平方メートル、絨毯は一五〇平方メートル※4、そして重さは十二・五ツェントナー (六二五キログラム)。絨毯は五百万個の結び目でできており、これは休みなく働く機械で織るのはなく、手仕事でなされたことは、大変価値のあることで、さらに女性の技術者によって製作されたということとは特筆すべきことだ。絨毯が製作された工場で働く二百二十二人の技術者のうち、一番高い技術を持った八十七人が遠い国の君主のための絨毯製作を任された。毎日十九

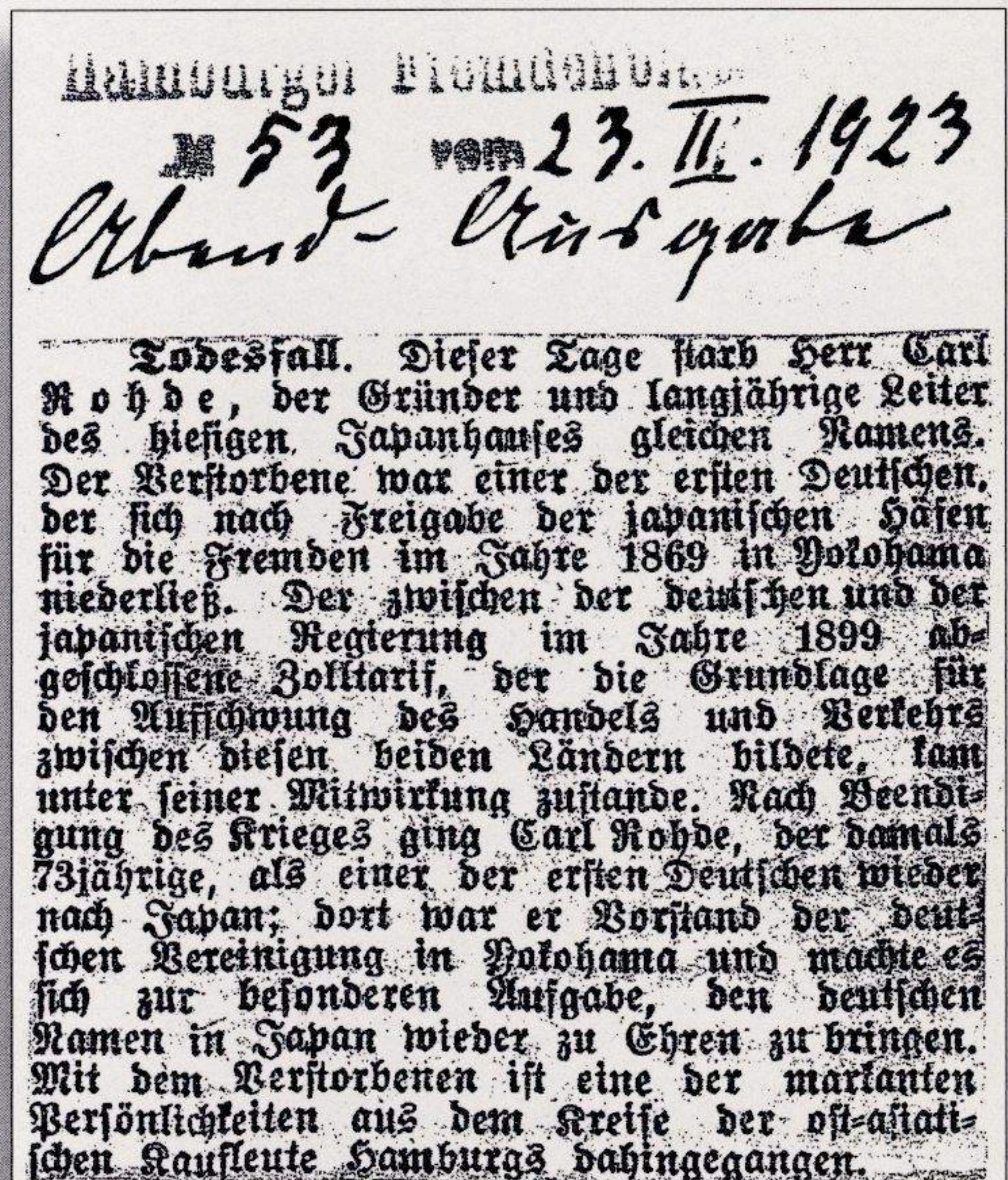


写真6 皇居御造営局から発注を受けたカール・ローエの死亡記事※5 Staatsarchiv Hamburg蔵

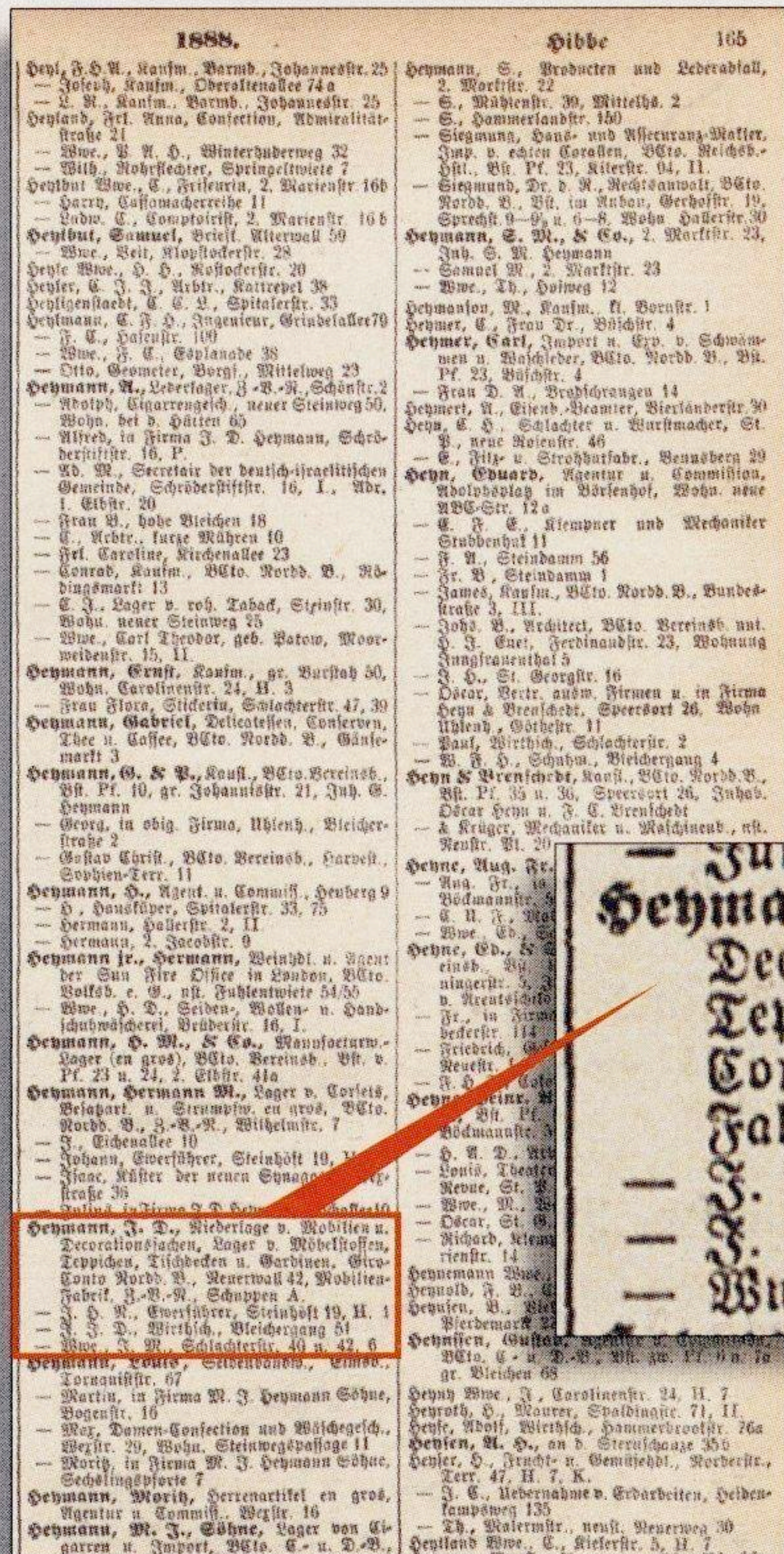


写真5 ハイマンについて記載されている Hamburger Adressbuch 1888 Staatsarchiv Hamburg蔵

人が昼間、十八人が夜と交代で絶え間なく働き、そしてその勤勉な仕事ぶりのおかげで十月六日から十一月四日のたった約四週間で、偉大な作品を完成することができた。』

J. D. Heymann, Niederlage v. Mobilien u. Decorationsfachen, Lager v. Möbelstoffen, Teppichen, Tischdecken u. Gardinen, Giro-Conto Nordd. B., Neuerwall 42, Mobilien-Fabrik, J. V. M., Schuppen A. J. D. R., Ewerführer, Steinhöft 19, H. 1 J. S. D., Wirthsch., Bleichergang 51 Wwe., J. M., Schlachterstr. 40 u. 42, 6

のアトリエでデザインされ、ルネッサンス・スタイルが選ばれました。三色でデザインされた絨毯の基本色はゴールドブロンズで、同じような三色のふち飾りで区切られていました。『濃い赤と薄い赤の間にある心地よい赤が際立っている』と報道されています。

『このような製品は、ドイツははじめ諸外国の何処の企業でもいまままで製作されたことがなかった事は、自慢できることである。』と当時のベルリナー・ターゲブラット新聞は語っていますし、また『我々の報道がでっち上げではない証拠に、ドレスデンにあるデパートの多くやベルリンのデパート、ゲルソン・ベルリン (Gerson-Berlin) ※6も、この工場の製品を展示する権利を得ようと多大の努力を払ったが叶わなかった。直接の発注者のハイマン社はこの絨毯に対して六千マルクを支払った。日本の君主



写真7 当時の絨毯工場の建物を利用したフォルスト※7織物博物館



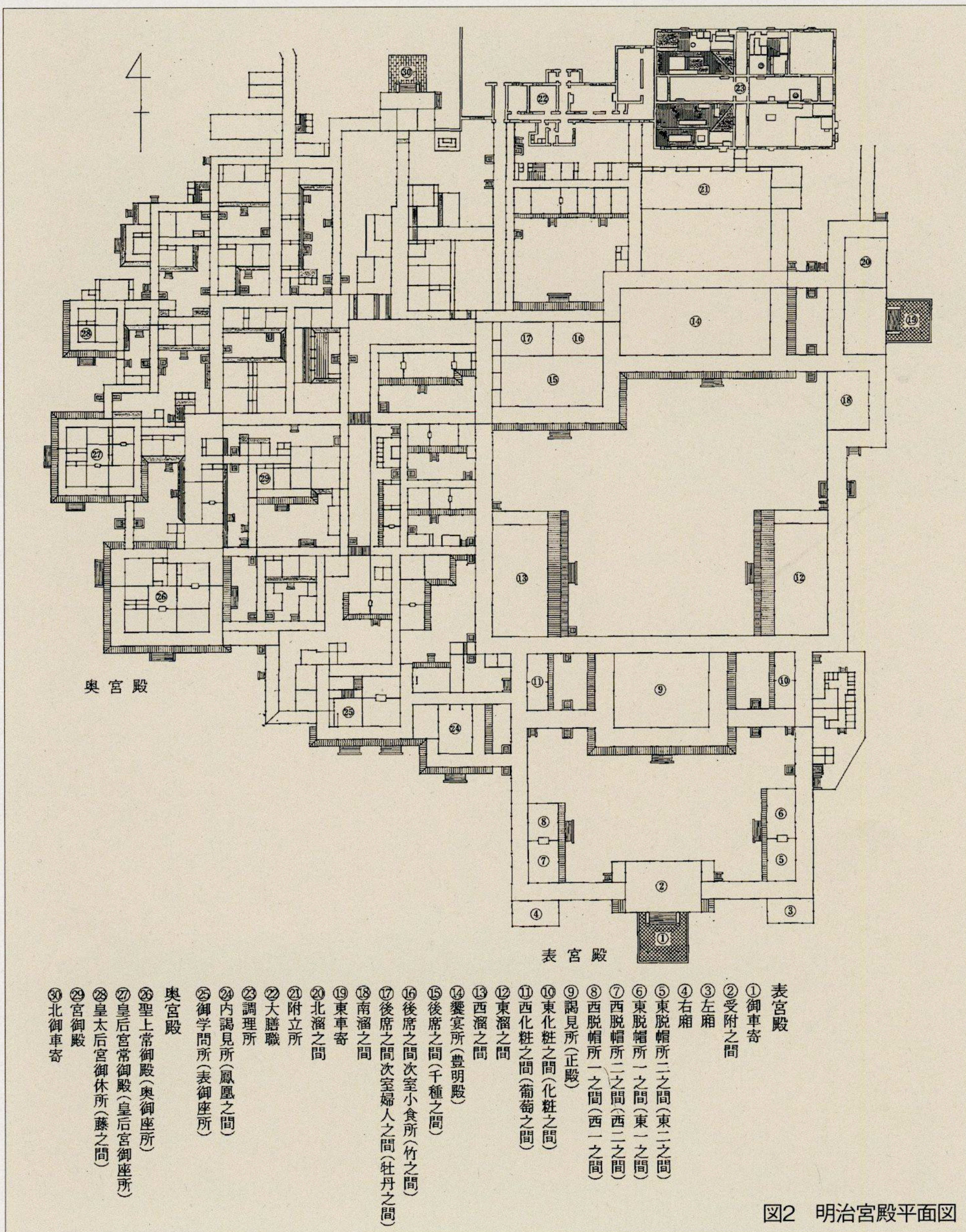
写真8 フォルスト織物博物館での「織る」のではなく「結ぶ」絨毯の製作実演

の食堂と控室の二室の絨毯はペルシアスタイルの絨毯で、既に工場から出荷されており、他の三つのサロン・婦人用着替え室・接見室は今年中に船で出荷される予定だ。』と報道しています。

しかし無類の輝きとそれにつながる絨毯会社とその経営者 Oscar Prietsch の名声は年月を経て、明らかに輝きを失っていきました。ペルシア絨毯という言葉をきいて、コトブスを連想する人は今日ほとんどいません。日本でも天皇の宮殿に製品を納

めたほどの会社のことはすっかり忘れ去られているようです。

明治宮殿は天皇の公務を行う表宮殿と天皇の家族が居住する奥宮殿からなりたっています(図2)。表宮殿の家具調度は日本と西洋の要素が混ざったもので、日本風の本製の天井に、例えばシャンデリアが吊るされていたり、床は床板が張られていました。奥宮殿は全く日本風の内装に整えられましたが、そこにさえ暖炉や机、椅子、絨毯が用いられました。



(博物館明治村「明時宮殿の杉戸絵」1991より)

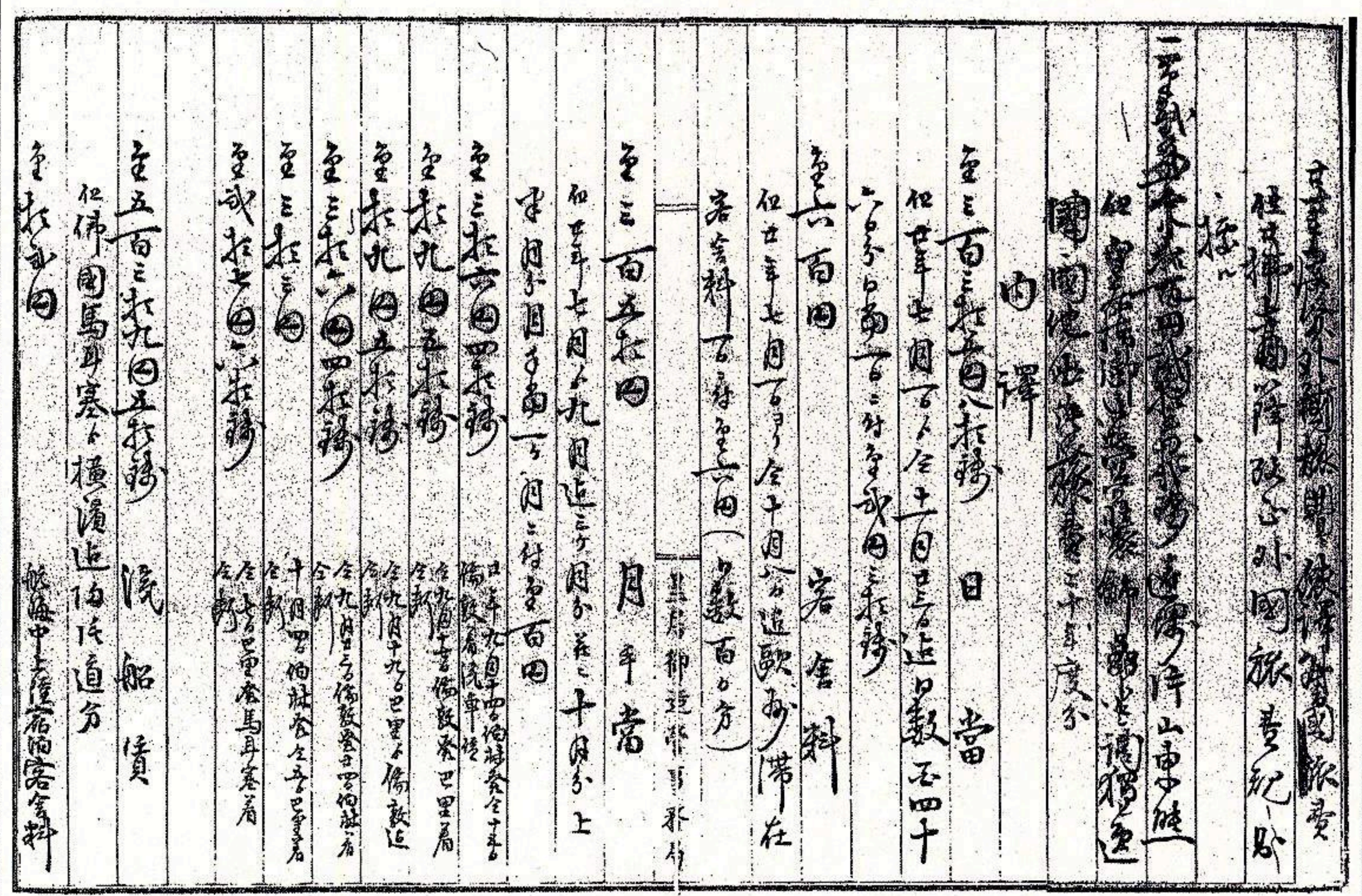


写真9 廿年度分外国旅費仕訳書\*8

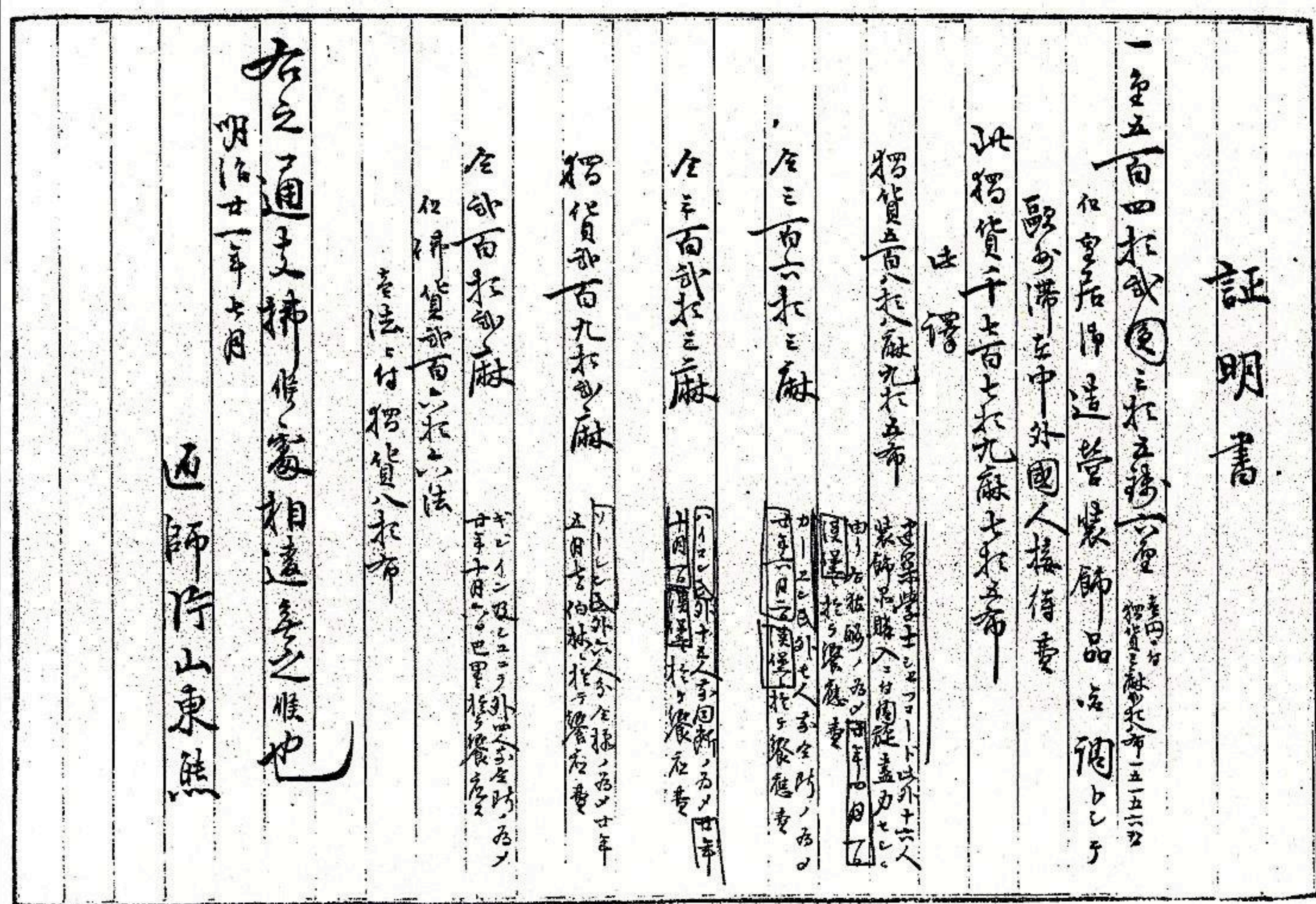


写真10 外国人接待費勘定書\*8

一八八六（明治十九）年東京の宮内省皇居御造営局は横浜に駐在しているドイツの商社カール・ローデ社（Carl Rohde & Co.）に新宮殿に必要な家具とインテリアの調達を委託しました。同時に、模様や色が宮殿にふさわしいかどうか判断するため、日本からドイツへ専門家を送り込むことも決定されました。代表団は著名な建築家片山東熊の指揮の下、同年十二月、日本を立ち、フランスのパリ、ドイツのベルリンやハンブルクに滞在したあと、再びパリ、そしてイギリスのロンドンを經由して一八八七年十月に日本への帰国の途につきました（写真9）。

日本使節団の滞在の詳細、殊にコットブスに行つたかどうかなどは、正確に伝えられてはいませんが、絨毯に関する新聞記事からは、ハイマン社がカー・ローデ社の契約相手であったこと、そして最初の二枚の絨毯が横浜へ発送され、その時期は十月五日と十一月三十日であったことがわかってます。片山は現地で宮殿用に製作された製品に非常に満足したようです。現在宮内庁に遺されている資料から、彼ができたあがった製品に深い感謝を表すために、一八八七年十月一日のハンブルクを立つ前にハイマン氏はじめ十五名の関係者を招待し、贅沢な晩餐会を催したことがわかります（写真10）。コットブスからの絨毯は、一九四五年五月二十五日のアメリカ軍の爆撃により宮殿が完全に破壊されるその日までそこにあったということです。

WONDE, Beate（ベルリン森鷗外記念館 副館長）

- ※1 現在のドイツ・ブランデンブルク州南部とザクセン州東部の地域。ポーランド国境に近く、スラブ系のソルブ人が多く居住する。
- ※2 O. Prienschで五万枚目の絨毯の完成を記念した記念写真。多くの女性労働者はソルブ人の民族衣装である頭巾を被っている。
- ※3 トルコの町スミルナに因んで名付けられた。スミルナは現在のイズミルの旧名。
- ※4 「皇居造営録 片山技師独逸出張裝飾品購買諸件 第19号」（宮内庁書陵部蔵）の中に綴られている「翻譯 御裝飾品説明書」の中の「謁見所用家具及敷物」の項には次のように記されている。「スミルナー」敷物  
但其品質ハ帝王質（最上ノ意味）ニシテ凡十「メートル」二十三「メートル」
- ※5 カール・ローデは日本が開国したごく初期の頃に横浜で開業し、日独間の交流に貢献したと記載されている。
- ※6 ゲルソン百貨店  
当時ベルリンを訪問する上流階級がかならず訪問する百貨店。今のKaufhausのようなもの。ユダヤ人服飾デザイナーのヘルマン・ゲルソン（1873-1861）が一八四八年に開店したベルリンで一番古いデパート。そこで売られる彼がデザインした婦人服で有名。プロイセン、ロシア、英国、アイルランド、スウェーデン、ノルウェー各国の王室やドイツ帝国とも取引があった。ヘルマンが亡くなる直前には、皇帝ヴィルヘルム一世の正装マントの注文を受けていた。彼の死後会社はますます成長し、店の従業員だけでも二百四十人、その他の家内作業人員は千五百人にもなった。一八九四年のヘルマン・ゲルソン社の年間収入は三千万マルクと業種内の一位を誇った。  
百貨店内にある喫茶店でコーヒーを飲むことは、森鷗外が独逸日記に記しているカフェー・ヨステイヤカフェー・パウアーとならんで、ひとつのステータスであった。  
ヘルマン・ゲルソン（Hermann Gerson）  
（一八二三年二月二十八日ケーンニヒスベルク（ノイマルク）生、一八六一年十二月六日ベルリン没）はベルリンのユダヤ人モード・デザイナー。当時のベルリンを代表する服飾専門の企業家。本名ヒルシユ・ゲルソン・レービン。商人レービン・ゲルソンの息子としてケーンニヒスベルク（ノイマルク）で生まれる。一八三七年ベルリンのバオ・アカデミー（Bautekademie）でバルト・ウント・ゲルソン社（Wald & Gerson）を共同設立し、白い刺繍ものや絹レース、チュール、縁飾りやレースのカーテン等の素材や白地の布類を販売。一八三九年以降ゲルソン社となる。一八四八年には、近くのヴェルダシーエン・マルクト五番に移転。ベルリンで最初のデパートとして有名。
- ※7 フォルスト（Forst）はコットブスから電車で30分位のポーランドと国境を接する街。  
一時は絨毯製造で栄えたが、第一次・第二次の世界大戦、東西ドイツ統一などの影響を受け、多くの工場は製造を中止し、現在ではかつての絨毯工場の建物を利用した織物博物館のみで往時の様子を知ることができる。
- ※8 いずれも「皇居造営録 片山技師独逸出張裝飾品購買諸件 第二（二）第八号」（宮内庁書陵部蔵）  
翻訳に際しては、大山市国際交流員 佐々木ゼルマー・シユテフ・アニーの協力を得た。  
Staatsarchiv Hamburg・宮内庁の文書に関しては博物館明治村学芸員中野裕子が調査を行った。